



# 日本SPF豚協会だより

2020. 10  
No.81



## 提言

## 知に働けば角が立つ情に棹させば流される

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構  
動物衛生研究部門 疾病対策部 病性鑑定グループ

## 山田俊治

新型コロナが日本に入って来たことがわかった時、その対策について苦慮することになるのではと思った。口蹄疫や豚熱の防疫対策における問題に準えて考えたからだ。人が完全にコントロールしている飼育環境下の家畜において、ひとたびでも病原体の侵入を許すとその防疫対応は経済面のみならず精神面でも大変なこととなる。まして、自由に経済活動を行っている人間の行動は制限することができない。

家畜伝染病が発生した場合、発生農場はもとより病原体に汚染された可能性のある関連施設に対して搬出や搬入など家畜の移動制限をかけることが鉄則となる。解体工事などの現場では柵や塀などで囲ってから工事を行う。さもなければ、土埃や瓦礫が現場周辺に飛び散ってしまうほか、関係ない人や車両がみだりに近づき、事故が起こりかねない。いわずもがな伝染病の防疫でも土埃や瓦礫という病原体の散逸を防ぐには、“囲い”が不可欠である。ただ、伝染病防疫においては土埃や瓦礫と違って病原体は目で見ることができない。このため、“囲い”の設定が難しい。発生農場から情報を元に時間的にも遡りながら病原体の拡散範囲を探ることとなるが、最初に発生が見つかった農場が必ずしも発生源とは限らない。また、国内に病原体が存在していないような海外伝染病の場合、国外まで調査しなければならない。いずれにしても初発の発生から時間をかけずに“囲い”を設け、早急に浄化作業に入ることが肝要である。

一昨年に発生を許した豚熱では、発生農場を中心に移動制限区域や搬出制限区域という“囲い”が素早く設定され、農場など関係施設の防疫措置は適切に行われた。しかし、自由行動している野生猪に感染していたため感染源の根絶が難しい状況が続いている。現在、“免疫壁(ワクチンベルト)”を形成して感染野生猪の群れを囲い込むべく、経口ワクチンの

散布を行っているが、思うように“囲い”はできていない模様だ。たとえ“囲い”ができたとしても集団免疫を期待するワクチンの利用だけでは、短期間に感染源を根絶させることは難しい。“囲い”の中の感染猪の排除ができないからだ。効果的な手立てが見つかるまでは感染猪と農場との接点を断つことに努めるほかない。先に改正された飼養衛生管理基準はまさにそれを踏まえたものだ。農場に病原体を「持ち込まない」である。そして万一発生した場合には病原体を「持ち出さない」である。

農場でワクチンを使用しよく消毒しているから、発生の危険性はないと思っても、しっかりと意識がなければ、いつ“持ち出す”側になるかもしれない。ワクチンを接種したからと言って必ず免疫されるわけでもなく、免疫されても発症を抑えるだけで病原体を殺滅しているわけではない。また、消毒においても消毒液にさっと浸けただけではほとんど効いていない。消毒効果を発揮するには作用時間が必要であるし、有機物の存在下では本来の効果もでない。むしろよく水洗した方が効果的かもしれない。病原体は水で希釈されると濃度が低下し感染量に達しなくなるだけでなく、浸透圧の影響でも感染性を失う。つまり、何かしらの行為を行ったから大丈夫ではなく、行為の意味を理解した意識を持つことが大切だ。いくら立派な柵や塀で“囲い”を作ってもそれを管理する人に意識がなければ、病原体の侵入を許すことになってしまう。

防疫マニュアルなどは大概行為のみが示されていて、しかも「言うは易し行いは難し」のようなことが書かれている。それは万人向けには致し方ないことである。表面的な文字面に囚われない、かといって感覚的な対応にならない手順書や「細則」を作ることは難しい。まさに「知に働けば角が立つ情に棹させば流される」だ。

# 秋のセミナーの 東京開催は中止に 表彰式などホームページ上で 動画配信

## —協会事業の見直しと 新型コロナウイルス感染対策について—

新型コロナウイルス感染拡大がまだ終息に至らない中、協会事業も大きく変化せざるを得ない状況です。今までの取り組みと今後の進め方についてご報告します。

### 今までの取り組み

#### ●会議の一部をリモート化

前号でもご報告いたしましたが、6月の総会は書面表決に変更し、すべての議案について、全代議員にご承認いただくことができました。

6月の認定委員会は委員長一任とし、濱岡委員長、岩村副委員長および事務局のみの参加にて開催いたしました。当日の審議中に出た疑問点等については、ピラミッド委員に都度問い合わせ確認したうえで認定しました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、と場検査が間に合わずヘルスチェックデータが揃わなかった農場（35CM農場）については3か月間の認定期間延長を認めました。

9月の認定委員会では、Web会議も導入しました。両委員長以外の認定委員はZoomミーティングを利用してのリモート参加とし、認定審査が行われ、6月に期間延長した農場を含め審議しました。リモート参加者は10人を超え、多少のトラブルはあったものの、リモート参加者からの報告、事前申請も行われ、概ねスムーズな開催となりました。

ました。

8月7日に開催したピラミッド委員会は、事務所参集は在京ピラミッドから1名のみ、正副認定委員長および事務局とし、ほかはリモート参加と、一部Web会議（Zoomミーティング）を導入しました。毎年10月に出展していた「ちくさんフードフェア」の中止、セミナーの開催方法、と場ヘルスチェック検査の実態と今後のあり方、SPF豚農場認定細則案の検討等、今後の事業の進め方等について協議することができました。

### これからの事業について

#### ●11月のセミナーは中止、 農場表彰は現地で表彰式を開催

現状にあつては、東京に一堂に会してのセミナーは困難と判断し、11月11日、KKRホテル東京で予定していた開催は中止としました。

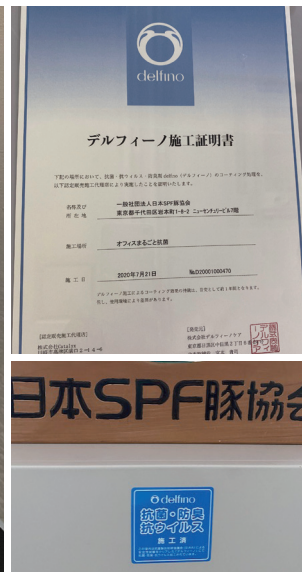
毎年実施している成績最優秀CM農場の表彰については、何とか実施ができないか方法を検討した結果、該



▲飛沫防止パネル



▲体温測定装置



▲抗菌コーティング施工証明書、シール

当農場、ピラミッドおよび関係各位の協力により、現地に出向き表彰式を実施することになり、表彰状およびトロフィーの授与が可能となりました。

総合生産成績最優秀賞表彰式は10月20日(火)、商品化頭数最優秀賞表彰式は10月28日(水)、それぞれ開催を予定しております。当日は事前に収録した表彰農場選考委員会委員長の講評も発表します。

表彰式の模様は動画撮影し、後日協会ホームページ上にて配信いたします。

また、例年行われているCM農場生産成績年次報告ですが、こちらも動画を収録し、ホームページにて配信します。

受賞農場含め詳細については改めてご案内いたします。告知については協会だよりや郵送による案内と合わせ、メール等の活用も視野に入れ、ピラミッドと協力して整備していきます。

### ●会議のリモート併用持続

12月以降の認定委員会や理事会なども、引き続きリモートによる参加を併用しながらの開催を検討する一方、

感染防止対策を徹底し、安心して一人でも多くの方に事務所にお越しいただけるよう、努力します。

## 協会のコロナウイルス感染拡大防止措置について

### ●事務所のコロナ対策

事務所内には空気清浄機、デスクおよび会議用テーブルには飛沫防止パネルを設置、定期的な換気も実施しています。手洗い、手指消毒も徹底しています。

エレベーターホールには消毒用アルコール、AI顔認証体温測定装置を設置、37.0°C以上の場合は入室を見合わせるよう依頼しています。

事務所内は7月に抗ウイルス・抗菌剤を室内全体に噴霧し、手指を介して感染する「接触感染」を予防するコーティング処理を行いました。この噴霧は人体および内装物には無害で、コーティング面で不活化を促し菌やウイルスの増殖を抑え、約1年間その効果が持続するものです。

2014年6月に始まった連載も今回(25回目)で最終回を迎えることになりました。本稿では、我々をとりまく豚のウイルス病の現状を総括します。

ご存じのように、動物の感染症は時に畜産業や食の安全の脅威として、生産者から消費者まで多くの人々を巻き込む社会的・経済的問題を繰り返し引き起こしてきました。診断技術や予防法の進歩に伴って徐々にこれらの問題が解決され、わが国の家畜衛生現場では清浄化困難な慢性・持続性感染症や複数の病原体による複合感染症への対策が主流になっていくかに見えました。ところが、21世紀間近になって、人の移動や物流の増加・迅速化とともに世界的に重要家畜伝染病の流行地域の拡大や新興・再興感染症の発生が目立つようになり、人獣共通感染症の重要性も増大するなど、人・動物を含め新たな感染症の時代を迎えることとなりました。特に厄介なのがウイルス病です。それを決定づけるかのように、わが国では一度撲滅に成功した豚熱(Classical swine fever; CSF)が2018年9月岐阜県の養豚場において26年ぶりに発生しました。再びワクチンが接種されるようになったため、現在は沈静化していますが、人の制御が及ばない野生イノシシの間に感染が広がったことによって先の見えないCSFウイルスとの厳しい闘いが続いています。一方、風土病であったアフリカ豚熱(African swine fever; ASF)が、2007年に黒海とカスピ海に挟まれたジョージアに飛び火して以降、徐々に周辺国に拡大し続け、ついに2018年8月、世界最大の養豚国かつ豚肉消費国である中国に侵入しました。その後じわじわとアジアの国々に拡散しつつあります。わが国は侵入を許していませんが、2019年にアジア地域の発生国より入国した旅行客の不法持ち込み豚肉ソーセージから感染力のあるASFウイルスが分離されました。今や遠隔地で発生している感染症がいつ日本国内で発生してもおかしくない事態を迎えていることが現実味を持ってご理解いただけるでしょう。

**ブタの  
ウイルス病**  
  
連載 No.25



**おわりに  
ーウイルス感染症の  
新時代を迎えてー**

農研機構 動物衛生研究部門 海外病研究拠点

**山川 睦**

CSFやASFなどの悪性伝染病は、家畜伝染病予防法によって家畜(法定)伝染病に指定され(表)、その防疫は特定家畜伝染病防疫指針に則って実施されます。昨今の事態に迅速・的確に対処するため、本年法律が改正され、野生動物の家畜伝染病蔓延防止措置の法定化や、家畜の所有者・国・都道府県・市町村・関連事業者の責務の明確化、飼養衛生管理基準の遵守に係る是正措置等の拡充、家畜防疫官の権限等の強化がはかられました。動物検疫による徹底した侵入防止対策に加え、万が一侵入した場合には摘発淘汰、移動禁止、緊急ワクチン接種、予防的殺処分など蔓延防止のための迅速かつ確かな防疫対応が求められます。もちろん、早期発見・早期封じ込めを成し遂げるためには、生産現場における日常的な対策が基本となります。CSFやASFであろうと、これまでの連載で紹介されてきた他のウイルス病であろうと、昔も今も感染症対策の根本に変わりはありません。病原体を農場や飼育施設内に持ち込まないよう、仮に侵入しても異常にすぐ気づくよう、衛生状態を常日頃から高レベルに維持しておく必要があります。

宮崎県での口蹄疫発生から10年が経過しましたが、その脅威も未だ衰えていません。思いもよらぬ新型コロナウイルス感染症の影響で人々の交流がほとんど途絶えた現在、海外病の侵入リスクは以前より減少していると推測されますが、国から現場に至るそれぞれのレベルで、関係者一人一人がより一層強い警戒心を持って侵入および蔓延防止対策にあたらなければならなくなっているのです。(了)

表. 家畜(法定)伝染病\*

疾病名	病原体	対象家畜	備考
牛疫	ウイルス	牛、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	獣医学や国際獣疫事務局(OIE)設立の発端となった牛の代表的伝染病。2011年に撲滅宣言が出された。
口蹄疫	ウイルス	牛、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	アジア、中東、アフリカを中心に分布。日本では2010年に発生後、清浄化。
流行性脳炎	ウイルス	牛、馬、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	蚊によって媒介される人獣共通感染症。日本脳炎、東部馬脳炎、西部馬脳炎、ベネズエラ馬脳炎、ウエストナイルウイルス感染症(馬)を含む。
狂犬病	ウイルス	牛、馬、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	人獣共通感染症。日本では1957年(猫での発生)を最後に撲滅。
水疱性口内炎**	ウイルス	牛、馬、豚、水牛、しか、いのしし	アメリカ合衆国、中南米に分布。口蹄疫類似疾病として類症鑑別上重要。
炭疽	細菌	牛、馬、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	人獣共通感染症。近年日本での発生はまれ。
出血性敗血症	細菌	牛、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	熱帯地域を中心に発生。日本には存在しない。
ブルセラ症**	細菌	牛、めん羊、山羊、豚、水牛、しか、いのしし	人獣共通感染症。日本ではほぼ清浄化。
豚熱**	ウイルス	豚、いのしし	アジアを始め世界各地で発生(北米や豪州を除く)。日本では一度清浄化を達成したものの、2018年に26年ぶりに発生。
アフリカ豚熱**	ウイルス	豚、いのしし	2007年にアフリカからコーカサス地方に侵入後、東欧やロシアに拡大。2018年に中国で発生後は周辺国に徐々に拡大中。
豚水疱病**	ウイルス	豚、いのしし	日本では1975年以降発生がない。口蹄疫類似疾病として類症鑑別上重要。

\* 豚関連を抜粋

\*\* 日本獣医学会からの提言により名称変更された疾病

今回は消毒と乾燥について、少なからず誤解があるように思いますので記します。

先ず、図1は消毒液散布後の時間経過によるサルモネラ菌に対する除菌効果を調べたものです。

供試した消毒剤は逆性石鹼液(DDAC：塩化ジデシルジメチルアンモニウム10g/100ml) E 500倍液と高水準消毒剤の一つの過酢酸5%製剤H 200倍液です。

除菌効果は両剤とも消毒開始6時間後に上限に達することが分かります。また、除菌度は薬剤により異なることが分かります。

次に、図2は消毒液噴霧後、自然乾燥、急速乾燥そして乾燥しないように湿潤状態を保った状態における除菌効果を見たものです。ドライヤーで40分間急速乾燥した場合は同じ時間自然乾燥した場合の除菌率>90%よりも1桁除菌度が上がり>99%となることが分かります。この理由は急速乾燥により薬剤の濃度が濃くなったためと考えられます。自然乾燥6時間後の除菌率は>99.99%で急速乾燥の場合より2桁除菌度が上がりますが、湿潤状態つまり濡れている場合と同じ除菌度であることが分かります。

このことから、消毒後の乾燥は必須では無いことが分かります。しかし、同じ実験で完全に乾燥した消毒液は以後消毒効果が無いことが証明されていますので、急速乾燥により除菌度は一時的に高まるものの最終的な除菌度は急速乾燥しない方が高くなるということです。家畜をピストン輸送するトラックの荷台など短時間内でより消毒効果を高めるためには急速乾燥が有効ですが、畜舎など放置時間を半日とれる場合は自然乾燥がよいことが分かります。また、半日後完全に乾燥していなくても除菌できているということです。

一方、消毒前の水洗後の乾燥は必須です。図3のように消毒する面は大小様々な凹みがあり、その中の汚れと菌が水分と一緒に残っていると消毒液が浸透しにくいことと消毒薬が水分で薄まってしまうので十分な消毒効果が得られません。しかし、水洗後完全に乾燥できない内に消毒しなければならない場合は、消毒薬の濃度を2倍にすることです。

消毒効果は濃度を濃くすれば高まるとはいえ薬剤の限界がありコストも上がりますから、指定濃度内の希釈倍率で消毒するようにしましょう。(研究提案三宅、横関正直 畜産の研究68-1 2014)

図1 消毒後の時間経過による除菌度の変化

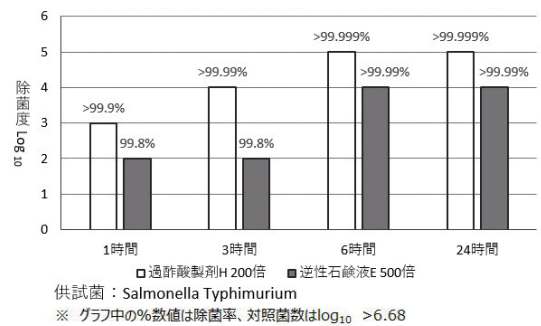


図2 消毒後の乾燥条件による除菌度の変化

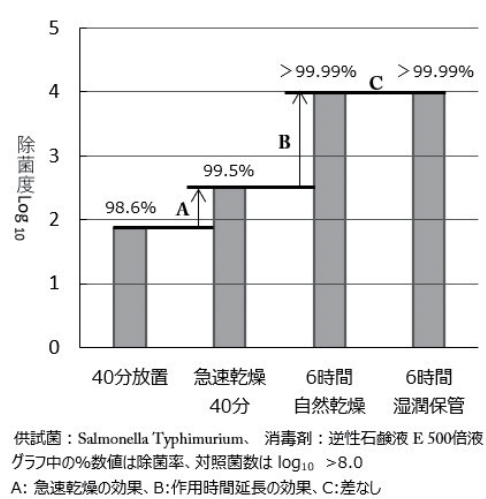
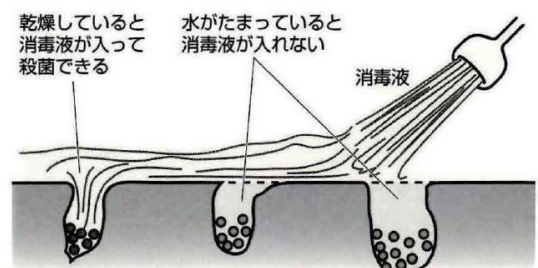


図3 水洗後の乾燥の重要性



横関正直 畜産現場の消毒 緑書房 2014

第3回

農場バイオセキュリティ強化のための最新情報



# 消毒前・後の乾燥の効果について

アニマル・バイオセキュリティ・コンサルティング(株)

三宅眞佐男

## 協会からのお知らせ

### ●飼養衛生管理基準が改正・施行されました

#### ガイドブックも公表

今年7月、家畜伝染病予防法改正に先立ち見直しが進められていた飼養衛生管理基準が、一部を除いて施行されたことをご存じのとおりです。

新しい飼養管理基準は「家畜防疫に関する基本的事項」「衛生管理区域への病原体の進入禁止」「衛生管理区域の衛生状態の確保」「衛生管理区域からの病原体の散逸予防」の4つの項目に分かれ、養豚生産者はその遵守が義務付けられています。

防護柵や防鳥ネットの設置は11月、飼養衛生管理マニュアルの作成は来年3月までに完備することが求められます。

詳細は農林水産省ホームページで確認できます。

[https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku\\_yobo/k\\_shiyou/index.html](https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/k_shiyou/index.html)

また、飼養衛生管理基準を生産者向けにわかりやすく

説明した飼養衛生管理基準（豚、いのしし編）ガイドブックも作成され、農林水産省のホームページからダウンロードできます。参考になさってください。

[https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku\\_yobo/k\\_shiyou/attach/pdf/index-115.pdf](https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/k_shiyou/attach/pdf/index-115.pdf)

SPF豚農場認定細則も改正飼養衛生管理基準の遵守を前提に、細かい内容について整備を進めています。

認定農場として恥ずかしくない、基準を満たした農場であるよう、さらなる防疫設備・管理の徹底をお願いします。



### ●今年のちくさんフードフェアは中止となりました

毎年10月に神奈川県川崎市で開催され、協会も出展していた「ちくさんフードフェア」（日本食肉流通センター主催）、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

となりました。

昨年も台風19号接近のため直前で中止となり、残念ながら2年連続の出展中止となってしまいました。

## 認定情報

### ●令和2年9月認定農場

※6月の認定委員会において3か月間の認定期間延長が認められ、今回認定された農場

（有効期間：令和2年9月3日から3年6月末日まで）

北海道・鈴木ビッドファーム、青木ピッグファーム(株)、(有)フロイデ農場、福島県・(有)東和牧場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、群馬県・JA東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、利根沼田ドリームファーム(株)、(株)畜産経営研究所前橋農場、千葉県・(株)ユウアイ、高橋幸雄養豚場繁殖農場、同肥育農場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、同第2農場、石毛宏司養豚場、宮澤泰徳養豚場、岡山県・岡山JA畜産

(株)荒戸山SPF農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、愛媛県・富永養豚、(株)多田ファーム、JA西日本くみあい飼料(株)愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、(株)多田ファーム天貢農場、長崎県・JA全農長崎県本部五島種豚供給センター、宮崎県・(有)レクスト繁殖農場、同肥育農場、ジャパンミート(株)川南農場、ジャパンミート(株)御池農場、クリーンファーム(株)、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場（以上33農場）

## プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



# 千切りキャベツの 豚肉巻きレンジ蒸し

●レシピ提供・ひこま豚食堂&精肉店 Boodeli

店長 水野奈緒子 (北海道札幌市)

10月になったとはいえ、あまりの猛暑・酷暑の夏の疲れがまだまだ抜けられない方も多いのではないのでしょうか。今回は疲労回復にぴったり、ビタミンB1たっぷりの豚肉とキャベツをゴマダレでさっぱりといただくメニューをご紹介します。レンジを使えばかんたん、香味ゴマダレがポイントですね。ぜひお試しください。

### ●材料 ● (作りやすい量)

- ・キャベツ 250g
- ・豚バラ肉しゃぶしゃぶ用 250g
- ・塩 適宜
- ・黒こしょう 適宜
- ・酒 大さじ2
- ＜香味ゴマダレ＞
- ・長ネギ 1/3 本
- ・ミョウガ 1個
- ・しょうゆ 大さじ2
- ・砂糖 大さじ1
- ・酢 小さじ1
- ・ごま油 大さじ2
- ・豆板醤 小さじ1/2
- ・すりおろしショウガ 小さじ1/2
- ・すりおろしにんにく 小さじ1/2

・白ごま 適量

### ●つくり方 ●

- ① キャベツを千切りにして水にさらし水気を取ります。
- ② 長ネギをみじん切りにします。ミョウガは薄く輪切りにして水にさらして水気を取ります。
- ③ 豚バラに塩・こしょうをしてキャベツを巻いていきます。
- ④ 巻き終わりを下にして、耐熱皿にのせて酒を回し入れます。
- ⑤ ラップをして火が通るまで電子レンジ500Wで4～5分加熱します。
- ⑥ ボウルに香味タレの具材・調味料全て入れて混ぜ合わせます。
- ⑦ お皿に盛りつけて、⑥をかけたら出来上がりです。

### ★水野シェフからのアドバイス

キャベツのほかに、もやしや水菜などの野菜でもおいしく召し上がれます！

## 認定情報

### ●令和2年9月認定農場

(有効期間：令和2年9月3日から3年9月末日まで)

北海道・ササキSPFファーム、(有)山中畜産長沼農場、同千歳農場、(有)浅野農場、(有)高橋畜産、(有)ゲズント農場繁殖センター、同肥育センター、岩手県・(有)ケイアイファウム北上農場、(農)八幡平ファーム、(農)ジョイフルファーム八幡平、秋田県・(有)ファームランド、(有)ポークランド第二農場、茨城県・常陽発酵農法牧場(株)、(有)米川養豚場、オヌマファーム、山本ファーム鹿嶋、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、群馬県・(有)ほそや、長野県・長野県農協直販(株) SPF種豚センター、(有)岩垂原エスピーエフ農場、(有)クリーンポーク豊丘農場、(農)エスピーエフこがねや第一農場、

※次回認定委員会は令和2年12月3日(木)の予定

千葉県・岡野茂樹養豚場、(有)東海ファーム倉橋本農場、同猿田農場、同第2肥育農場、同第1肥育農場、(有)菅井物産飯岡SPF農場、(有)下山農場第1農場、同飯岡農場、愛知県・豊橋飼料(株)種豚センター、岡山県・全農畜産サービス(株)岡山AIセンター、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産矢下繁殖農場、同上馬場肥育農場、同矢下肥育農場、香川県・(株)七星食品多和ファーム、長崎県・大西海ファーム七釜肥育農場、同白岳肥育農場、大分県・(有)九重ファーム、同第2農場、宮崎県・(株)ファームテックえびの種豚場、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、同阿久根事業所、(株)ファームテック大口農場、そお元気(株)ファーム野方農場(以上46農場)



**田谷**  
**ミートセンター(株)**  
(千葉県東庄町)

**豚肉一筋、4代目社長は  
チーム力で地元の生産基盤支える  
現役ラグーマン**



田谷ミートセンター(株)社長田谷雄一さん

(上) 直売所店内

(下) 大人気のメンチコロッケなどの総菜コーナー

千葉県の北総地域は関東有数の養豚生産地。今回ご紹介する田谷ミートセンター(株)は、東庄町食肉センター事業協同組合のすぐ隣に工場があります。

1962(昭和37)年、精肉店として開業、1970(昭和45)年には枝肉問屋・田谷畜産を設立、豚肉カット・正肉販売を開始、1991(平成3)年に田谷ミートセンターとして株式会社化し現在に至ります。

社長の田谷雄一さん(48歳)は精肉店を始めた祖父から数えて3代目、家畜商だった曾祖父を含めると4代目になります。2011(平成23)年、現会長の父・長太郎さんの跡を継いで社長に就任しました。幼いころから家にも周囲にも豚がいて身近だったこともあり、物心ついた時から家業をつぐものだと思っていたそうです。

高校時代から始めたラグビーは今でも地元のクラブチームで続けるほど。本来のポジションは長身を生かしたFWですが、メンバーがいなければBKもこなすそうです。

大学は夏休みに牧場でアルバイトがしたいと北海道の学校を選んだものの、学内のアメリカンフットボール部に所属、地元のラグビークラブチームと掛け持ちで競技一筋の学生生活になってしまったとか。

卒業後は東京や神奈川で5年間修業し、入社となりました。修業時代は小売店、加工品製造、食肉と流通段階を逆から経験したことがとても面白かったそうです。ハム・ソーセージなどの加工品の

製造・販売を始めた際は修業当時の人脈を生かし、師匠にアドバイスをもらい、最初は一人で取り組んだそうです。

昨年秋には地元生産者の要望を受け、直売所も始めました。精肉や加工品のほか、精肉販売店時代の祖父母の味を再現した総菜も販売しています。中でもメンチコロッケが絶品で大人気だそうです。直売所全体の売り上げも当初の予想を大きく上回っているとか。

地元で認定農場が多いこともあって同社が取り扱う豚肉の7割がSPF豚認定農場産だそうです。地の利を生かして、集配はすべて自社で行い、田谷社長も自ら出荷に立ち会うなど生産者とのコミュニケーションも図れています。

「いろんな地方の豚肉を見に行っただけで、この地域の豚肉が一番だと思いますね。悪いものがない」ときっぱり。

社員は38名、ベテラン社員もいる中、若い社員も多く、社内は明るいアットホームな雰囲気です。「長い休みもとれないし、大変な仕事だけど、ワンチームで」とラグーマンらしい一言。高校生の長男もラグビー選手、将来の夢は獣医とのこと、頼もしい限りです。

ラグビーと毎晩の晩酌以外は仕事ばかりという田谷さんですが、自ら農場経営に携わることも視野に入れていきます。それも「取り扱い量をもっと増やして地元の美味しい豚肉を東京はじめ全国の人に届けられるようにしたい」のが目的とか。「本業はあくまで肉屋ですから」と。豚肉一筋の経営者の顔がのぞきました。(編集部)

**編集後記**

コロナ禍にみまわれてはや8か月。様々な具体的なコロナ対策は当たり前風景になりました。今年のインフルエンザの大流行は2月ごろと言われていましたが、早々と終息。一説には、コロナ対策が功を奏したともいわれています。翻って、如何にこれまで、手洗い、うがい、マスク等基本的な感染症対策をやってこなかったかということなのでしょう。提言にもあるように「持ち込まない、持ち出さない」ためには、何をするのか。根本を理解して、自分の農場の人・豚・モノの取り扱いを細部まで今一度見直し、改善点を発見し、即実行していくことが大切ではないでしょうか(世)。



**日本SPF豚協会認定農場産シール**

このマークは  
**日本SPF豚協会**の  
登録商標です

**日本SPF豚協会だより**

第81号 2020年10月1日発行(季刊)  
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2  
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376  
e-mail:j.spf.a@nifty.com  
http://www.j-spf.com/  
発行人 北島 克好  
編集人 藤田 世秀